

日本人のコミュニケーションと日本語

永 田 雅 子

1. はじめに

コミュニケーションは、人間の情報のやり取りによって起こるものであるから、言語によっての差異は文法構造の統語論ほどには、重要視されない傾向がある。実際、日本語教育においても、文法項目に費やす時間が殆どであり、コミュニケーションにさかれる時間は少ない。文法の学習が個別的で教えやすいのに対し、コミュニケーションには、文法はもちろん、前後の文脈、話し手 聞き手の関係、場面などが関与した中で、ある内容が伝達され解釈される総合的まとまりであるために、教えにくいのが現状である。漢字、語彙や文法の点で優れている学生が、ともすると日本人とのコミュニケーションが下手だったり、読解が伸びなかったりする場合が多い。本稿では、日本人のコミュニケーションと日本語の特徴を、英語と対照すべき言語現象として捉え、その差異、特徴をまとめ、より自然な日本語習得がなされることを目的とする。

2. 接 続 表 現¹⁾

一般的に接続表現の使われる割合は英語より日本語のほうが多いと言われている。特に日本語の会話文においては、頻繁に使われるが、英語ではその接続表現は訳されないものが多い。例えば、日本語会話の文末、文中では、英語の because に相当しない「から」が非常に多く用いられている²⁾。IMJ の教科書から例をとることにする。

- 1) ジョンソン：のどがかわいたから、何か飲みましょうか。

Johnson: I'm thirsty. Shall we have something to drink?

(IMJ p. 118 以下 下線は筆者による)

- 2) (ジョンソンが急用で行けなくなった音楽会の切符を譲る)

加藤：でも、ただでいただいても申し訳ないから、お金を受け取ってください。

Katoo: But I can't take it for nothing. Please take let me pay for it.

(IMJ p. 236)

上の例では、依頼・勧誘表現とともに用いられている。「から」がある日本語の場合と「から」がない英語の場合を比べてみると、実質的な意味に変わりないが、ない場合は、日本人にとっては、きっぱりと自己の要求を告げているという印象を与え、事務的な感じがする。日本

語の「から」は単なる事態そのものの理由説明よりは相手に対して事情を説明するという態度を示すことによって、親しみあるいは配慮が示されていると考えることができる。

依頼・勧誘の場合だけでなく、話し手の判断を示す場合にも、それが相手への親しみや配慮が入る場合は「から」が用いられているが、英文の場合はそれに対応する接続詞のないのが普通である。

3) (加藤が譲られた切符の代金を払おうと申し出たのに対して)

ジョンソン：いいえ、いらなくなったものをあげるんですから、お金なんかもらうわけにはいきませんよ。

Johnson: No, I'm giving you something I don't need. It won't do to receive money from you. (IMJ p. 236)

次に「けれど／けど／が」の接続表現を見てみよう。この場合も依頼・勧誘に使われることが多い。

4) (友人の山下に)

ジョンソン：ところで、今晚音楽会の切符があるんですが、どうですか。

Johnson: By the way, I have a ticket for a concert this evening. Would you like to go? (IMJ p. 236)

英語では上の例のように、接続のない場合が多いようであるが、and や so で接続することもある。しかし、逆接の but は使われない。故にここで使われる「けれど／けど／が」には逆接の意味はなく並列的である。しかし、同じ依頼・勧誘で使われる「から」と違って、遠慮が含まれていることが特徴的である。「から」の依頼・勧誘のほうは、相手の利益になるか、負担がかからないことが予期されるが、「けど」のほうは、相手の好意ないし決断を待つための表現で、間接的である。

日本語と英語の「けれど／けど／が」の使い方でも共通するものもある。

山下：天気はだいじょうぶだった？

松本：うん、釣っている間はだいじょうぶだったよ。帰ろうとしたとき、降りだしたけど。

山下：そう、ぼくも行こうと思っていたんだけど、残念だった。

Yamashita: Was the weather good?

Matsumoto: It was while we were fishing. It started to rain when we started back, though.

Yamashita: Did, it? I really wanted to go with you. Too bad I couldn't.

(IMJ p. 144)

ここでは「けど」が2回使われているが前者のほうは、前述の事柄と直接関連があるため、英語でも *though* と訳出されている。この英語の *though* は、文末に使われていることからわかるように、*but* や *however* の逆接の接続ではなく、付加的接続である。この意味におい

て「けど」は、英語の文末で使われる *though* に相当すると言える。しかし後者のほうは、後が話者の感想になっており、訳されていない。日本語の「けれど／けど／が」には本来の接続の意味から離れて、話題を導入したり話の流れをよくするためのコミュニケーションにとって重要な機能があるといえる。

以上、日本語の会話における接続表現の特徴についてみてきたが、書き言葉、とくに論理的な文章の接続表現はどうであろうか。西原は、日本語の原文を日本語をよく知っている米国人が逐語訳したものと、米国人編集者がそれを英語として自然になるように修正した結果を対比させて接続表現の数を調査した³⁾。原文と翻訳文においては、極端な差は見られなかったが、自然な英語に書き直したものを比べると、英語における接続表現の少なさが浮き彫りにされた。教科書 ICJ の付録にある読み物、芥川の『蜘蛛の糸』の翻訳文の場合も、日本語のほうが英語より多く使われていることがわかる。

- 7) ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹道端を這って行くのが見えました。そこで韃陀多は早速足を上げて踏み殺そうとしましたが、～

Once when he was passing through a deep forest he saw a small spider crawling along the roadside. He quickly lifted his foot and was about to crush it to death ~

(ICJ p. 324/p. 390)

上の例では 英語には接続表現が全く使われていない。ただ ICJ の翻訳は逐語訳であるため、英語と日本語の接続表現がかなり相応しているのも事実である。しかし、ここで注目すべき点は、英語でいわゆる接続詞を使わず、*with*、分詞構文、セミコロン、といった他の方法をとっていることである。

- 8) こう思いましたから、韃陀多は早速そのくもの糸を両手でしっかりつかみながら～

With this thought in mind, Kandata quickly got a firm grip on the thread ~

(ICJ p. 326/p. 391)

- 9) もとより大泥棒の事でございますから、こういう事には昔から慣れきって～

Having originally been a master burglar, he was quite used to climbing.

(ICJ p. 326/p. 391)

- 10) そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がり

There was no help for it; he stopped for a brief rest and, suspended from ~

(ICJ p. 326/p. 391)

セミコロンは接続の機能をもつが、前文の関係によって順接、逆接、並列、付加など、様々な解釈ができる。分詞構文も然りである。この点において、英語はある意味で日本人にとって、不明瞭でわかりにくい言語である一方、日本語はかなりの接続表現を用いることによって文脈の前後関係を確認する親切な言語といえる。ただ、この接続表現の頻繁な使用が文を長くして、英語と比べて簡潔さに欠ける面もある。日本語では一つの文で表現されているのに、翻訳では

二つの文になっている例をよく見かける。例えば、

- 11) すると 一生懸命にのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつの間にかかかれています。

All the toil and exertion he had put into the climb had been worth it.

The Pool of Blood, where he himself had been suffering ~

(ICJ p. 326/p. 391)

- 12) 健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしさとで、暫くはただ、馬鹿のように大きな口を開いたまま、目ばかり動かしておりました。

At this discovery, Kandata was both amazed and horrified.

For a while all he could do was gape at them ~

(ICJ p. 326/p. 391)

日本語が冗長であると言われる原因の一つに、こうした接続表現が見逃せない。

接続表現を意味別に見た場合、日本語では「順序・換言・例示」の並列系の表現や注釈の部分的補足の表現が多いのに対し、英語では「順接」「逆接」を表すものが多いことも注目に値する。英語を日本語に翻訳した場合、英語の and が「このため」と訳され、原文にはない箇所に流れを良くするために「そのため」が使われていることを報告した研究がある⁴⁾。この場合、日本語に使われている順接の接続表現は真の順接というよりは、並列の機能をもつ接続に近いと考えられる。先の例でも太線で示した 10) そこで や 11) すると といった日本語の順接表現は英語では省略されてしまっている。英語のほうから見れば、省略しても影響のない接続表現となるわけである。日本語の順接の本来の意味は薄れ、文章の流れをよくする並列系に意味が移行している。並列系の表現は、内容の展開にさして大きい影響を与えない。しかし「順接」「逆接」は内容の展開に主要な影響を果たすと考えられる。この点において、英語の接続表現は密度の高いものといえる。一方、日本語にみられる接続表現は、話の流れをうまくつなぐ、潤滑油のような働きをしていると思われる。これは会話表現ではより顕著な特徴であった。依頼・勧誘・話題の流れを重視する機能をもつ、潤滑油の役目が殆どで、本来の順接・逆接の強い意味ではなかった。このように、潤滑油の機能をもつ接続表現は、日本語のコミュニケーションには欠かせないものと言えよう。

3. 省 略

省略というのは、本来、省略しても聞き手・読み手に省略部分が何かわかってもらえるという前提がある。もし省略部分が聞き手・読み手に復元不能であれば、その省略はコミュニケーション上、失敗だということになる。日本のように言語によるコミュニケーションへの依存度がもともと低く、その分、非言語への依存度が高かった「察しの文化」では様々な言語的省略が起りやすい文化的状況にあるといえる。また、ウチとソトを峻別する文化型では、省略がより自然なコミュニケーションをもたらすことを留意すべきである。日本的な省略には例えば、「遠慮からくる省略」と言った文末の省略がある。

- 13) 森田：じゃ、私の知っている店がありますから、そこへご案内しましょうか。

ジョンソン：でも、それじゃ

Morita: Then shall I take you to a store I know?

Johnson: That would be asking too much. (IMJ p. 172)

- 14) 春男の父：や、スミスさん、いらっしやい。

スミス：は、ごぶさたいたしまして。

Haruo's father: Well, well, Joe! Good of you to come.

Smith: I'm sorry I haven't kept in touch better. (ICJ p. 21)

遠慮の気持ちが省略ないし言い淀みにつながっている。英語ではむしろ上のように形を整えて答えるほうが礼儀とされているようである。

英語では文の統語上、絶対省略できないものに代名詞があるが、日本語では省略したほうが、より自然である。この省略を可能にしているものに、日本語の授受表現と敬語の使用度の高さが貢献していることは言うまでもない。また、うちとけたウチの話し言葉では大抵の助詞が省略可能である。但し「が」は本来新しい情報を示し、情報は共有されていないので、省略はできないが、例えば話し手と聞き手がバスを待っていて、もうバスが来るはずだという期待感が共有されている場合は「が」も省略できる。

このように、日本語の省略は、統語上の柔軟性と、察しや共有、ウチ・ソトといった文化的背景の上に成立していることがわかる。

遠慮からくる文末の省略以外にも、聞き手が分かってくれるだろうという察しをふまえての、流れをよくする省略は日本語にはかなりある。例えば、

- 15) (日本人がお盆の時のラッシュを外国人に説明している場面)

日本人：帰省客はだれもかれも大荷物だから。

外国人：混むのがわかってるのに、どうしてまた。(そんなに持って帰るのですか。)

Japanese: All the people going home for Bon had so much to carry.

Foreigner: They know it's going to be crowd, so why do they take so much?

(ICJ p. 136 括弧は筆者による)

指示詞による省略も日本語には多く見うけられる⁵⁾。日本人が「あれ、どうなった」や「あれ、持ってきて」だけで話が通じていることは、よく観察されることだが、外国人学習者には理解しにくいことと思われる。特に、あ列は、単に距離の問題でなく、話し手聞き手の知識の共有を前提とするからである。共有を重視し、英語のように既出の名詞を代名詞化することを統語的規則としてもたない日本語では、語の照応は「こそあど」の指示詞によって確認されることが多い。一単位の語のみではなく、文脈照応にも同様の方法が用いられ、かつその頻度が高い。例えば次の「そう」は前文を受けている。

- 16) Haruo: もうお客さん扱いはやめたほうがいいんじゃないかな。スミスさん、どう。

Smith: ええ, そうしていただいたほうがいいです。

Haruo: It's about time we quit being so formal. What do you say, Joe?

Smith: I'd rather just be treated like one of the family. (ICJ p. 22)

一方, 英語のような言語では情報の共有があっても, 統語規則として, 主語は殆ど省略されず, 代名詞を用いて結束性を明示することが必要である。日本語のような, 授受表現, 敬語表現がそれほど特徴的でない英語においては, 統語上の規則が優先的にならざるを得ないし, 省略は日本語に比べて少ないと言ってよいだろう。但し, 英語には代動詞を使った動詞句削除という日本語にはない省略が存在することは衆知のことであり, この点で英語は簡潔である。

17) 吉田: どこかへ出かけましたか。

佐藤: いいえ, どこへも行きませんでした。

Yoshida: Did you go out?

Satoo: No, I didn't. (go out anywhere) (IMJ p. 44 括弧は筆者による)

しかし, 英語の省略はあくまでも, 文法上の規則から説明できるものであって, 文化的背景による, 柔軟性をもった日本語の省略とは異なるものと言えよう。

さて, 日本語の省略の機能は何であろうか。久野にとっては, 「言わなくても聞き手にとって自明のインフォメーションを省くことによって文の冗長度を下げること」であった。それに対し, 牧野は日本語の省略に, 聞き手を引き込む機能があると指摘している。省略は会話の中だけでなされるものではない。書き手はいろいろな文体を用いて, 文の流れをつくり, 読み手を引きつけるわけだが, 省略の技法も大切なものである。牧野の考えでは, 省略は読み手を書き手, あるいは文中の人物に, つまり, ウチの人に引き込む機能があると結論づけている。省略の機能が, いつも「引き込み」とは限らないと思われるが, 久野の冗長度を下げることだけが, 英語はともかく, 日本語における省略の機能ではないことは確かなようである。日本語の省略には, 話し手と聞き手, 書き手と読み手の関係によって変化するものであり, 柔軟性があることから明らかであろう。

4. く り 返 し

英語が代名詞による結束性をもつ表現を用いているのに対し, 日本語は統語論的柔軟性を持ち, 省略の多い表現を使うことを先に述べた。ところが, 矛盾するようであるが, 日本語には英語で省略されるところに多くのくり返しが多々見られるもの事実なのである。考えられる第一の原因は, 英語の修辞法に存在する「同じ語をくり返し用いるのは良い文章ではない」という制約と, 日本語におけるその欠如である。例えば,

17) A: この前, 高山に行ってきたよ。

B: あら, いい所へ行ったわねえ。

A: I just recently got back from a trip to Takayama.

B: Oh, you chose a good spot to visit!

(ICJ p. 95)

しかし上記の修辞規則は絶対的なものであるとは限らない。英語は形のくり返しを大変嫌うのであるが、意味のくり返しにはそれほどアレルギーではない。二度目の同じ表現を簡潔な名詞表現にするなど、意味のくり返しは実際多く行われている。英語のこういった形によるくり返しを嫌い、簡潔さを好む典型的な例は、先にも触れたが、代動詞による動詞句削除である。日本語の場合はこういった修辞法が存在せず、同じ言葉を何度もくり返すことに鈍感であることが特徴的である。

18) (妻が夫の24時間勤務のひどさを叔父に訴えている場面)

叔父：確かにひどいさ。でも会社を支えるのは、そういう人たちだと思われているよ。

出世するのも、もちろんその人たちさ。

妻：そうじゃない人たちは、出世しないんですか。

叔父：まあ、出世はしないだろうね。

uncle: Yes, it's awful. But employees like that are the ones who are thought to be the pillars of the company. And of course they're the ones who go ahead.

wife: You mean the others won't be successful?

uncle: Well, no, I don't imagine they will.

(ICJ p. 77)

くり返しは、もちろん会話だけに見られるものではない。西光は、日本文学の英訳、特に日本人と英米人による複数の英訳がある作品を調査した結果、日本語の原文にはくり返しが多く見られ、英米人の英訳には省略が多い、つまり簡潔であるという点を指摘した。典型的な例として、谷崎潤一郎の『細雪』をサイデンステッカーが英訳したものを挙げているが、サイデンステッカーの次のようなコメントがある。『日本語では、一つの文章の中に、言葉数が多すぎたり、内容が重複しても、それほど耳ざわりにならないが、英語に訳してみると、しつこすぎる印象が与えられる。』先の接続表現で触れたように、日本語の英訳では日本語の一文が、英語では二つの文に分けられて翻訳されていた。日本語は冗長さに鈍感である一方、英語は簡潔さを好むことがうかがえる。

しかし、日本語のくり返しは冗長さ、しつこさというマイナス的な面だけ見いだされるわけではない。くり返しによって、確認をとり、聞き手、読み手との話題の共有を深め、文の流れをよくするという重要な機能がある。『蜘蛛の糸』の登場人物の紹介を例にとってみよう。

19) するとその地獄の底に、韃陀多と言う男が一人、外の罪人と一緒にうごめいている姿が、お目に止まりました。この韃陀多と言う男は、人を殺したり～

As he gazed, Buddha's eyes fell on the figure of a man named Kandata writhing with the other sinners at the bottom of Hell. This Kandata had been a ~

(ICJ p. 324/p. 390)

紹介した後の二度目の英訳では 単に「この犍陀多は」となっているが、日本語では「～と言う男は」をくり返している。日本人の読み手には冗長さは感じられず、むしろ文の流れがよく自然である。このように、くり返しに見られる確認は日本人のコミュニケーションには欠かせないものである。日本人の会話の中で相づちや、終助詞を頻繁に使って確認をとることからも明らかである。また「の／んです」⁶⁾ や「～なら」といった日本語特有の表現も確認をとって会話や文を進める機能を担っており、くり返しと一緒に使われることが多い。

20) 先生：アルバイトをしながら勉強するのは たいへんでしょうね。

学生：ええ、本当にたいへんなんです。

Teacher: Studying while working part-time must be tough.

Student: Yes, it really is.

(IMJ p. 130)

21) (ジョンソンが大野に住まいはどこかと聞く場面)

大野：郊外の公団住宅です。

ジョンソン：公団住宅なら、安くていいですね。

Oono: I live in public-funded housing in the suburbs.

Johnson: Then it's inexpensive, isn't it?

(IMJ p. 346)

このように、確認の機能をもつくり返しは日本語のコミュニケーションにおいて非常に特徴的なものであることがわかる。

さて、省略とくり返しの共存を許容するものは何であろうか。心理学においては、言語によって認知テンポが異なるのではないかという研究が Salkind, Kojima and Zelnicker によってなされた。彼らは日本、アメリカ、イスラエルの学童の認知テンポを Matching Familiar Figures test (MFF) という心理テストで比較対照した結果、反応時間がイスラエルの子供たちは短く、日本人の子供たちは長く、アメリカの子供たちはその中間であることを見いだした。日本人は認知テンポがゆっくりであるから、重要度がそれほど高くないものでも言及できるのは当然としている。

さらに、認知スタイルの研究では Embedded Figures Test (EFT) という心理テストを用いて、周りの状況に判断が左右される程度を計る野依存 (field-dependence) の研究がある。これによって客観—主観的表現の度合いが分かるという。英語国民と日本人の野依存の対照研究はまだなされていないが、カプランの分類では日本人と同じ分類とされる中国人とアメリカ人の対照研究はある。それによると、中国人はアメリカ人より野依存度の程度が高いという実験結果が出ている。という訳で日本人と中国人の野依存の程度がだいたい同等だとすると、日本人はアメリカ人よりも、野依存の程度が高いということになる。

この二つの心理学的研究から、日本人は認知テンポがゆっくりで野依存度が高く主観的な表現を好み、アメリカ人は認知テンポが速く、野依存度が低く客観的な表現を好むという仮説が成り立つ。認知が言語に影響を与えるのか、またその逆の言語が認知に影響を与えるのかは、まだ議論の余地があると思われる。しかし、互いに分かり合っていることは統語論的な柔軟性

からも省略するのが日本語として自然であるが、一方、認知テンポの遅さがあることから、共感、共有のためには、丁寧に確認してくり返すことにやぶさかではない言語だといえる。この省略とくり返しが共存することが、まさに日本語の特徴であり、日本人のコミュニケーションをかたちづくる土台と言えよう。

5. お わ り に

以上、日本人のコミュニケーションの特徴を探るために、日本語における接続表現、省略、くり返しに焦点をあて、英語との対照を通して考察を試みた。接続表現では、純粋な接続の機能よりも潤滑油的機能が多く、会話の流れ、文の流れをスムーズにする働きが多かった。また、省略では、文脈、場面からの推論と共有に依存するところが大きく、そこに日本語の統語上の柔軟性が相まって、省略は多く使われ、省略によってより共有が深まることがわかった。一方、共有を強化するために、ていねいに確認をとるくり返しも、日本語では多く使われることがわかった。日本人は互いに確かめ合いながら、共通の場をつくってコミュニケーションをとっていくのが、特徴的である。水谷は、日本人の話し方を話し手と聞き手の二人で作っていくという考え方に基づいて「共話」という造語⁷⁾を使い、欧米型の対話と区別をした。また、日本人がスピーチが下手だといわれることの根底には共話形式がすっかり身について「対話」形式に対する馴染みのうすいことが大きな要素として存在しているとして、国際社会に生き残るためにも、共話から対話への切り替えが必要だと提唱した。「対話」形式の持つ特徴を「共話」の特徴と反するものとするならば、それは、相手との共通の理解を前提とせず、相手の賛同や同感を特に期待せず、しかも自分の意思や意見を相手に理解させることを目的として話すことである。「共話」の特徴は、共通の理解を前提とし、いちいち相手の聞く意思を確かめながら話すことである。対話では全く違った心的態度が必要となる。共話から対話への切り替えは、いわばウチからソトへの切り替えであり、当然ある程度のエネルギー消費が必要になる。共話的な話し方なら、全部言わなくてもわかってくれる相手がいれば、気が楽である。確かに国際社会に生き残るために、対話への切り替えも必要だが、共話的な話し方が可能にする精神安定の機能も忘れてはならないだろう。そしてまた、日本語の特徴は話し言葉に限られたことではないことを留意すべきである。接続表現、省略、くり返しに見られる日本語の特徴は、書き言葉にも共通する根の深いものである。日本人が欧米型のコミュニケーションを取り入れていくことも大切であるが、日本語学習者に対しては、日本語のもつコミュニケーションの特徴を理解してもらい、日本人とのコミュニケーションを円滑にできるように指導することがやはり必要であると思われる。

〈注〉

- 1) ここで取り上げる接続表現は、接続詞あるいは接続助詞が使われているものである。
- 2) 英語の since や as は、日本語の依頼や勧誘に使われる「から」に似た使い方ができるようである。
- 3) ここでは原文中の接続助詞「が」は数えられていない。

- 4) 佐藤恭子の『接続表現の日英比較』による。
- 5) 西原は『Newsweek』誌の英語版と日本語版の記事を使って、指示詞の数を比較した。
- 6) 『日本語教育事典』の「のだ」の項では、『改めて疑いのない事実だと確認する意を表すものであり、客観的事実を描写するものではない』とある。
- 7) 1981年8月号の『言語生活』の誌上で使われたのが始めである。

参 考 文 献

- 久野 暁 (1978) 『談話の文法』大修館
- 西原 鈴子 (1990) 「日英対照修辭法」『日本語教育』72号
- 西光 義弘 (1987) 「認知スタイルと言語類型」『言語学の視界』大学書林
- 西光 義弘 (1990) 「くり返しの日英対照談話構造」『ことばの饗宴—うたげ』筧壽雄教授還暦記念論集 ころしお出版 p. 525-549
- 牧野 成一 (1993) 「省略の日英比較」『日本語学』9月号
- 牧野 成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』アルク
- 水谷 信子 (1989) 『日本語教育の内容と方法』アルク
- 水谷 信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12巻4号
- Salkind, Kojima and Zelnicker (1978) 「Cognitive tempo in American, Japanese and Israeli children」
『Child Development 49』
- サイデンステッカー, 安西徹雄 (1983) 『日本文の翻訳』大修館
- 佐藤 恭子 (1990) 「接続表現の日英比較」『ことばの饗宴—うたげ』筧壽雄教授還暦記念論集 ころしお出版 p. 551-562
- 上野多鶴子 (1999) 「コミュニケーションと日本語」『日本語学』6月号

例 文 出 典

- Japanese Language Center (1980) Intensive Course in Japanese (ICJ)
- Osamu and Nobuko Mizutani (1991) An Introduction to Modern Japanese (IMJ)